

西鶴作品の文章分析 —先行研究の計量文献学的検証—

上阪 彩香[†] 村上 征勝^{††}

江戸時代前期の作家井原西鶴（1642?-1693）の手によるものとされる作品は多数残されているが、西鶴作品には様々な問題が提起されてきた。しかし、現在まで計量文献学の観点から検討された研究はない。本研究では品詞の出現率と助動詞の出現率を主成分分析で分析し、①『好色一代男』だけが西鶴の著作とする説②西鶴工房説③遺稿集が弟子によって補作や修正されたという3つの説の検証を試みた。

On a Quantitative Analysis of Authorship Problems in the Literature of Saikaku

AYAKA UESAKA[†] MASAKATSU MURAKAMI^{††}

This paper discusses authorship problems in the works of Saikaku Ihara, who was a famous writer in the Edo period. His work has been studied for three centuries, yet in spite of these efforts, there are some problems which remain to be answered. The aim of this research is to examine three hypotheses: (a) that Saikaku was the only author, (b) that there was a group of writers writing under that name, and (c) that works published after his death were rewritten by his followers. In this research, we analyze the frequency of main parts of speech and the frequency of some words of auxiliary verbs by means of a principal component analysis.

1. はじめに

江戸時代前期の作家井原西鶴（1642?~1693）の手によるものとされる作品は多数残されているが、西鶴作品に関しては『好色一代男』だけが西鶴によって著されたという森説（1955）や遺稿集が他人の手によって補作や修正されたのではないかという説など、様々な問題が提起されてきた。しかし、現在まで計量文献学[a]の観点から検討されたことはなかった。

本研究の目的は、先行研究で挙げられた以下の3点

- ①『好色一代男』だけが西鶴の著作だとした森説
- ②一時期に多くの作品が出版されたという観点からの西鶴工房説
- ③遺稿集が弟子の団水らによって補作や修正されたのではないかという説

について計量文献学の観点から分析することにある。分析は、品詞及び助動詞の出現率を用いて主成分分析で行った。

2. 西鶴作品の先行研究

西鶴に関しては、本名・家系など出自については現在のところ未詳な部分があるが、彼の草子としての第一作である『好色一代男』（1682）の刊行を持って浮世草子と呼ばれるものが完成されたといわれている。（宗政五十緒, 1969）

しかし、西鶴作品とされるもののうち、どの作品を西鶴作品とするのかは研究者によって、ばらつきがあるのが現状である。これらに関して、西鶴研究に関しては以下のような研究がなされている。

- ①『好色一代男』だけを西鶴の著作とした森説

森は西鶴の著作とされている作品のうち西鶴が著したのは『好色一代男』だけであり、西鶴は作家ではなく編集者であると主張する。

また、森は実際に西鶴作品とされているものに、多少の疑問があるもの、大いに疑問があるもの、かつて西鶴作品とされていたものまであわせた30作品中、西鶴本浮世草子は20作品

『好色一代男』『諸艶大鑑』『好色五人女』『好色一代女』『西鶴諸国はなし』
『本朝二十不孝』『男色大鑑』『武道伝来記』『懐硯』『日本永代蔵』『武家義理物語』
『新可笑記』『本朝桜陰比事』『世間胸算用』『西鶴置土産』『西鶴織留』
『西鶴俗つれづれ』『万の文反子』『西鶴名残の友』『近代艶隠者』
に限られ、他の10作品

『梶久一世の物語』『好色旅日記』『好色盛衰記』『色里三所世帯』『新吉原常々草』

* [†]同志社大学大学院文化情報学研究科博士前期課程

* ^{††}同志社大学

a)計量文献学については『真贋の科学—計量文献学入門』村上征勝（1994）参照。

『眞實伊勢物語』『新小夜嵐』『浮世栄花一代男』『嵐は無常物語』『好色三代男』は西鶴を模倣して書いた模倣西鶴作品であり、西鶴本浮世草子 20 作品中、内容に詩が存在するという理由から浮世草子の中で西鶴が著したのは『好色一代男』だけであると主張した。また、残りの 19 作品に関しては『近代艶隠者』の 1 作品は西鶴の門下であった西鷺軒橋泉の作であり、他の 18 作品に関しては主として西鶴の門下であった北条団水の作としている。そして、主に団水の著作とされる 18 作品のうち『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『好色五人女』『好色一代女』『本朝二十不孝』『日本永代蔵』『世間胸算用』等は西鶴が編集し、『諸艶大鑑』『男色大鑑』『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』『本朝桜陰比事』等及び遺稿集の『西鶴置土産』『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『万の文反古』『西鶴名残の友』は団水が編集したと主張する。(森, 1955)

② 西鶴工房について

『西鶴入門』(中村, 1969)において、はじめて西鶴工房という言葉が用いられた。中村によれば西鶴工房とは、

「知人門人に命じ、または、彼らのほうから提出されたものを、諸事に編集癖のあった西鶴が面白おかしく加筆し配列して、自己の作品をも加え、興にのれば、自ら版下を書下ろしたりして、一部の書をなした。」

というものである。中村は浮世草子の多作者であった浅井了意が出版するにあたって、編者にえらばれたり署名者になったりしたという先例を挙げ、このような先例があったとするならば、『好色一代男』で有名作家となった西鶴が次々と好色物の編集者や作品の署名者になることは、当時(江戸時代)の出版界においてはごく自然なことであったと述べ、西鶴工房というものが存在していても不思議ではないと主張する。

『日本永代蔵』が出版された貞享 5 年から翌元禄 2 年の 1 年という期間は多作期であり、西鶴は 7 冊の浮世草子『日本永代蔵』『武家義理物語』『嵐は無常物語』『色里三所世帯』『新可笑記』『好色盛衰記』『本朝桜陰比事』を出版したという説もある。ここで、1 年という期間の中で 7 冊の本を著すことが、西鶴 1 人で可能であろうかという疑問が生じる。また、貞享 5 年から翌元禄 2 年に出版されたものの内容が貞享 3 年以前の西鶴の浮世草子に比べていくつかの違いが見受けられること、書肆の動向などからも、この時期に書かれた作品に対して西鶴が一人で書いたのだろうか、という疑惑が生じる。これらのことからこの時期、西鶴には助作者が複数おり、西鶴工房があったのではないかと、という疑惑が出てくる。

③ 遺稿集に関する疑惑

西鶴の没後、西鶴が生前に執筆し、未発表であった草稿を西鶴の門下である北条団水らが編集し、遺稿集として出版した。遺稿集には、亡くなった者によって残された草稿にどの程度編者の手が加えられているか、補作・補筆・修正・擬作が存在するかといった問題が生ずると考えられている。

西鶴の遺稿集は

- 第 1 遺稿集 元禄 6 年刊『西鶴置土産』
- 第 2 遺稿集 元禄 7 年刊『西鶴織留』
- 第 3 遺稿集 元禄 8 年刊『西鶴俗つれづれ』
- 第 4 遺稿集 元禄 9 年刊『万の文反古』
- 第 5 遺稿集 元禄 12 年刊『西鶴名残の友』

の 5 作品とされ、これらの遺稿集に対しても団水らが本文に手を加えたり、自分の作品をまぎれこませたりしてはいないかなどの疑惑が存在する。

4. 分析手法

4.1. 『西鶴全集データベース』について

本研究では『新編西鶴全集』(浅野晃, 富士昭雄, 谷脇理史, 西島孜哉, 小川武彦, 篠原進 2000)の 24 作品を底本として、村上研究室においてデータベース化された『西鶴全集データベース』を用いている。『西鶴全集データベース』では、表 2 に示した 23 作品がデータベース化されている。

表 1 分析対象となる西鶴作品一覧

番号	作品名	番号	作品名	番号	作品名
1	好色一代男(37480)	2	諸艶大鑑(46985)	3	好色五人女(20562)
4	好色一代女(27542)	5	西鶴諸国はなし(17024)	6	本朝二十不孝(18778)
7	男色大鑑(51775)	8	武道伝来記(49543)	9	好色盛衰記(21337)
10	懐硯(23250)	11	日本永代蔵(30052)	12	色里三所世帯(12234)
13	武家義理物語(22146)	14	嵐は無常物語(8730)	15	新可笑記(25631)
16	本朝桜陰比事(27283)	17	世間胸算用(21658)	18	浮世栄花一代男(23119)
19	西鶴置土産(18161)	20	西鶴織留(30298)	21	西鶴俗つれづれ(14797)
22	万の文反古(17453)	23	西鶴名残の友(12779)		

表 1 において、分析結果の図を見やすくするために作品に番号を付けた。以下、分析結果の図の番号はこの表に従う。() の中は各作品の総語彙数である。

『西鶴全集データベース』は、全文を単語に分割し、西鶴の作品に現れる単語各々に対して計量分析を行うのに必要となる品詞コードなどの情報を付したものである。『西鶴全集データベース』に準拠した場合、総語彙数は 578,617 語であり、最も長い浮世草子は『男色大鑑』51,775 語、最も短い浮世草子は『嵐は無常物語』8,730 語である。『新編西鶴全集 1 巻～第 4 巻・本文篇』(浅野晃 他, 2000)に入っている『椀久一世の物語』が、『西鶴全集データベース』には入っていないため、分析対象から外した。

データベースのデータの一例を以下に付す。これは『好色一代男』巻 1 の始まりの部分である。

表2 西鶴全集データベース (¥は改行)

作品名	巻	本文古字	本文新字	品詞	活用形	現代がな終止	現代がな活用
一男	巻一	けし	けし	動詞	連用	けす	けし
一男	巻一	た	た	助動詞	連体	た	た
一男	巻一	所	所	名詞		ところ	ところ
一男	巻一	が	が	助詞		が	が
一男	巻一	恋	恋	名詞		こい	こい
一男	巻一	の	の	助詞		の	の
一男	巻一	はじまり¥	はじまり	名詞		はじまり	はじまり
一男	巻一	桜	桜	名詞		さくら	さくら
一男	巻一	も	も	助詞		も	も
一男	巻一	ちる	ちる	動詞	連体	ちる	ちる
一男	巻一	に	に	助詞		に	に
一男	巻一	歎き	歎き	動詞	連用	なげく	なげき
一男	巻一	月	月	名詞		つき	つき
一男	巻一	は	は	助詞		は	は
一男	巻一	かぎり	かぎり	名詞		かぎり	かぎり
一男	巻一	あり	あり	動詞	連用	あり	あり

4.2. 分析手法

計量分析に用いる総語彙数は各作品によって異なるのが一般的である。そこで、出現数をそのまま用いると、総語彙数が多い作品において、ある単語の出現数が多くなることは、当然であると考えられる。本研究では、このことを回避するために出現率を用いることとする。

本研究では、品詞及び助動詞の出現率を用いて、主成分分析を試みた。品詞は文章の分析において最も基本的な情報であり、助動詞は著者の特徴がしやすい。また、品詞及び助動詞は出現率も高く統計学的な信頼性という観点から分析に用いられることが多い。よって、品詞の中でも総数が10,000語を超える上位7つ、名詞・助詞・動詞・助動詞・形容詞・副詞・連体詞を分析に用いることとなる。また、助動詞に関しては、総数が2,500語を超える上位5つの言葉「き・けり・ず・なり・る」で相関行列を用いた主成分分析を行う。

5. 分析結果

5.1. 品詞の観点から

5.1.1. 品詞出現率の分析

7品詞の出現率の主成分分析結果は図1である。主成分寄与率は、第一主成分では45.14%で、第二主成分では27.65%であり、第二主成分までの累積寄与率は72.79%となる。なお、図中の番号は表2に示した作品番号であり、矢印は各品詞の主成分ベクトルである。

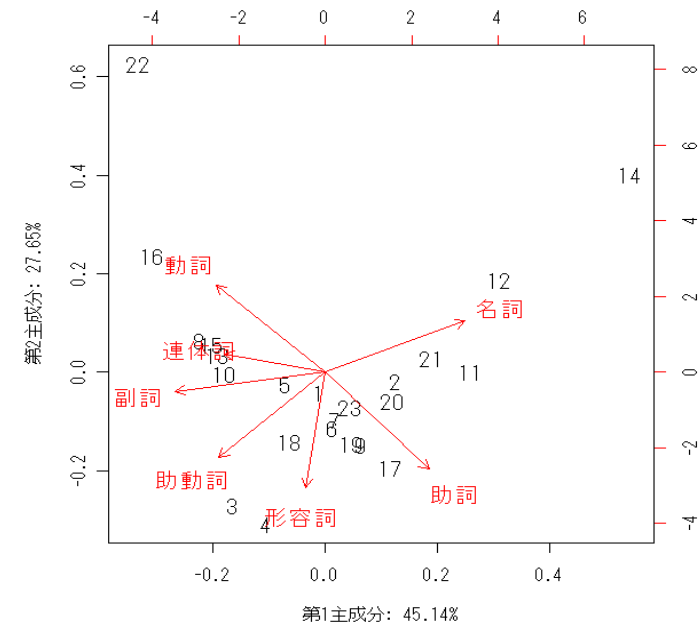


図1 品詞の主成分分析結果 (相関係数行列)

表3 品詞の主成分得点 (相関行列)

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
1	-0.08594797	-0.271892191	1.22300872	-1.1060772	-0.37935014	0.247228828	0.039491236
2	1.08262248	-0.11590874	0.55015772	-0.92463044	-0.22423123	-0.20177492	0.148596345
3	-1.3879658	-1.801945759	1.228829767	0.58111495	0.03138738	0.314467541	0.044604612
4	-0.88719326	-2.059523712	1.10537576	1.04359366	0.11892273	-0.13838237	0.040211306
5	-0.60328261	-0.15926514	-0.015473801	-0.74610941	-0.94060937	0.001634615	0.015245539
6	0.12359991	-0.755340755	0.029842473	0.8378351	-0.71132515	0.186005961	0.068754173
7	0.16024509	-0.651089313	0.426846776	-0.14865024	-0.31823453	-0.249690236	-0.060392131
8	-1.89403243	0.432185661	0.047807223	-0.04635177	0.48159578	-0.746041018	0.153991211
9	0.55259691	-0.98879148	-0.477073714	0.59058573	0.16248066	0.122165931	-0.03031782
10	-1.52742567	-0.023485581	-0.029606138	-0.18692545	-0.18771525	0.430173122	0.010301123
11	2.20476557	0.003620443	0.115383309	0.76103153	-0.10805573	-0.448920965	0.076599275
12	2.63927588	1.248773307	0.251632289	-0.02031258	-0.31516903	-0.294665823	-0.360033738
13	-1.63151817	0.229802054	-1.352700506	-0.2315325	-0.15882673	0.156302563	-0.003776165
14	4.61659112	2.68265359	-0.726651102	0.49128457	0.11433354	0.121251633	0.193848433
15	-1.72393066	0.37363724	-2.429230326	1.0994279	-0.20071799	0.007350707	-0.077799293
16	-2.63445212	1.569601357	-2.171984839	-0.70913731	0.34788567	0.141718518	0.013186066
17	0.98473019	-1.290346033	0.545233043	0.12959867	0.81842475	0.416483077	-0.101037766
18	-0.5400014	-0.938976612	-0.014005127	-0.62550283	0.37731231	-0.693358375	-0.069696491
19	0.3977735	-0.976221705	-0.141013236	-0.34728432	0.26940672	0.322647232	-0.056012598
20	1.01569982	-0.397621444	0.169581427	-0.64063206	0.26942196	-0.014327287	0.006372784
21	1.61153142	0.187274512	0.00140718	-0.56753837	0.45258121	0.356823871	-0.001405679
22	-2.84520103	4.181766982	2.654237414	0.58465757	0.13360662	0.077826512	-0.04796678
23	0.37151923	-0.478906681	-0.99160431	0.1815548	-0.03312416	-0.206183814	-0.002763642

第一主成分においては、名詞・助詞が正の方向に、副詞・動詞・助動詞・連体詞・形容詞が負の方向に影響を与え、第二主成分では、動詞・名詞・連体詞が正の方向に、形容詞・助詞・助動詞・副詞が負の方向に影響を与える。同じ図を本研究の問題とした3つの視点から解釈していく。

5.1.2. 森説の検討

森(1955)が西鶴本浮世草子とした20作品中『西鶴全集データベース』の中に存在する作品は19作品『好色一代男』『諸艶大鑑』『好色五人女』『好色一代女』『西鶴諸国はなし』『本朝二十不孝』『男色大鑑』『武道伝来記』『懐硯』『日本永代蔵』『武家義理物語』『新可笑記』『本朝桜陰比事』『世間胸算用』『西鶴置土産』『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『万の文反子』『西鶴名残の友』である。これらの作品について森は、主に門下の団水による著作であると主張している。『西鶴全集データベース』の中には、森説において西鶴本浮世草子とされた『近代艶隠者』が入っていない。これは『近代艶隠者』が西鶴作品ではなく、西鶴の門下であった西鷺軒橋泉の著作だということが現在通説となっているためである。また、森が模擬西鶴作品と主張した10作品中『西鶴全集データベース』に存在するのは4作品『好色盛衰記』『色里三所世帯』『浮世栄花一代男』『嵐は無常物語』である。

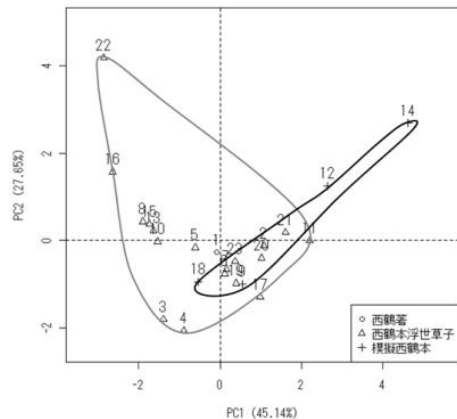


図2 森説の検討 (品詞の主成分分析)

森が分類したように(1)『好色一代男』と主に弟子の団水の著作とされるものにわかれるのか、西鶴本浮世草子と模擬西鶴作品にわかれるのかを検討する。

品詞の主成分分析の結果を森説に従って分類すると、図2となる。西鶴の著作とされる(1)『好色一代男』と主に弟子の団水の著作とされる作品については、西鶴本浮世草子の近くに位置することから区別できないと考えられる。

次に西鶴本浮世草子と模擬西鶴作品について考察すると、西鶴本浮世草子は中心から左側にかけて位置し、模擬西鶴作品は中心から右側にかけて位置する。模擬西鶴作品の中でも(12)『色里三所世帯』と(14)『嵐は無常物語』は西鶴本浮世草子から離れて位置する。これは、(12)と(14)において名詞の出現率が高いためである。このことから、(12)と(14)は西鶴本浮世草子と異なった特徴を持つと考えられる。それに対して(9)『好色盛衰記』と(18)『浮世栄花一代男』は西鶴本浮世草子の近くに位置する。このことから、(9)と(18)は西鶴本浮世草子と似た特徴を持つと考えられる。よって、お互いを明確に区別することはできない。

5.1.3. 西鶴工房説の検討

西鶴作品において貞享3年以前の作品と多作期(貞享5年から翌元禄2年)の作品に違いが見られた場合には西鶴工房が存在した可能性が考えられる。品詞の主成分分析の結果を、貞享3年以前の作品と多作期の作品との違いという観点から分類すると図3となる。貞享3年以前の作品は中心から下側にかけて位置している。これは副詞・助動詞・形容詞・助詞の出現率が高いためである。それに対して、多作期の作品のうち(9)『好色盛衰記』は貞享3年以前の作品のグループの近くに位置するが、他の多作期の作品は中心から上側にかけて位置する。これは、(9)では助詞の出現率が高く、(9)以外の多作期の作品では、動詞・連体詞・名詞の出現率が高いからである。よって品詞を用いた主成分分析の観点からは区別することが可能であるので、この結果からは西鶴工房説を否定することはできない。

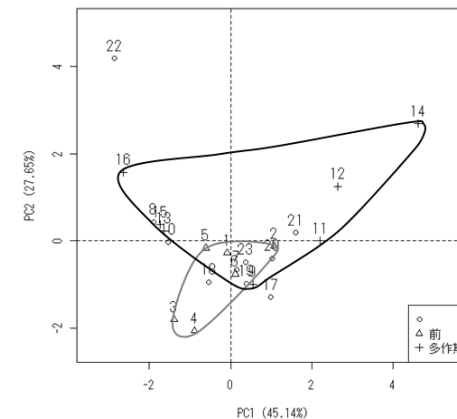


図3 西鶴工房説の検討 (品詞の主成分分析)

5.1.4. 遺稿集の検討

遺稿は生前に執筆され、出版されなかったものであるため、生前の西鶴作品と遺稿

集には共通性があるのではないかと考えられる。しかし、先行研究でいわれているように、編集者が手を加えることがあったのならば、遺稿集は生前の作品と異なった特徴を持つ可能性が考えられる。品詞の主成分分析の結果を遺稿集の検討という観点から分類すると、図4となる。遺稿集のうち(22)『万の文反古』は動詞・連体詞の出現率が高いため、他の遺稿集と離れて位置する。(22)以外の遺稿集は、中央から右側にかけてまとめ、生前の西鶴作品の比較的近くに位置する。この結果からは、(22)以外の遺稿集は、生前の作品と同様の特徴をもち、(22)は他の西鶴の遺稿集とは、異なった特徴を持つ可能性が高いといえる。

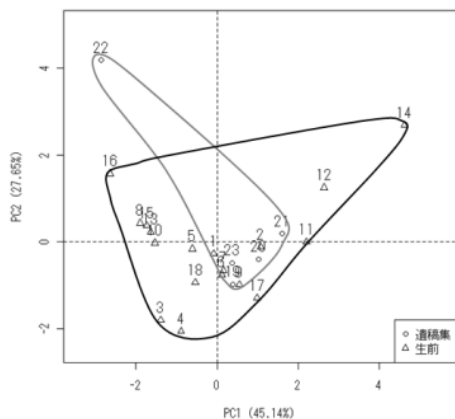


図4 遺稿集の検討 (品詞の主成分分析)

5.2. 助動詞の観点から

5.2.1. 助動詞における分析

次に品詞の中でも助動詞を情報として選択する。これは、助動詞は著者の特徴が出やすいと考えられる品詞であり、また出現率も高いためである。

西鶴作品において、『西鶴全集データベース』に準拠した場合、総助動詞数は42,180語であり、最も多い浮世草子は『武道伝来記』3,924語、最も少ない浮世草子は『嵐は無常物語』481語である。

主成分分析結果を図9に示す。主成分寄与率は、第一主成分では47.21%で、第二主成分では26.53%となり、第二主成分までの累積寄与率は73.74%であった。

第一主成分においては、「けり・き」が正の方向に、「ず・なり・る」が負の方向に影響を与え、第二主成分では、「ず・けり」が正の方向に、「る・き」が負の方向に影響を与える。同じ図を品詞の主成分分析と同様に本研究の問題とした3つの視点から解釈していく。

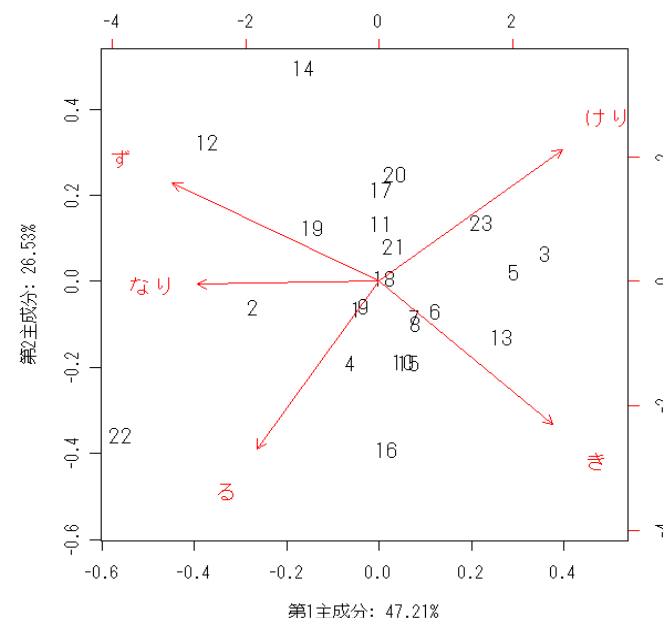


図5 助動詞の主成分分析結果 (相関係数行列)

表4 品詞の主成分得点 (相関行列)

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5
1	-0.3556978	-0.35609925	-1.762401739	0.79603406	-0.31557093
2	-2.00467895	-0.33148946	0.211132449	0.96854646	0.02098064
3	2.65774949	0.36126646	0.422129152	0.22535459	0.30758548
4	-0.43963338	-1.04417827	0.72614216	-0.16703086	0.26300414
5	2.17787567	0.13040198	0.714827367	-0.07428487	0.63556485
6	0.91571985	-0.37325467	0.400177386	0.46324865	0.02379712
7	0.57655194	-0.46282509	-0.27429362	1.5836276	0.21435812
8	0.60236741	-0.53161443	-0.635135038	0.3595312	-0.19546419
9	-0.2294096	-0.30606975	0.734961537	-0.48934295	-0.30731623
10	0.38507403	-1.02838532	-1.161555011	0.19555211	-0.05718679
11	0.03229722	0.74351298	0.378646033	0.07310596	0.57674912
12	-2.74663068	1.7880342	0.609223777	-0.05907443	-0.31372585
13	1.96114919	-0.70540814	0.008928828	-0.43791613	-0.12188163
14	-1.20584845	2.74811914	-1.622534469	-0.33174108	0.4089416
15	0.47500515	-1.03705636	0.676553643	0.57398442	-0.15504736
16	0.12540039	-2.14619545	-0.754746258	-1.89555294	0.02452297
17	0.02665287	1.18428917	0.064167769	-0.95287145	-0.05614441
18	0.08930698	0.04076082	0.32912056	0.08327564	-0.31295597
19	-1.06112109	0.7007901	1.866022327	-0.01169526	-0.33125492
20	0.25940156	1.37993261	-0.200903404	-0.45443306	0.24994226
21	0.23725577	0.45262081	-0.389662841	0.75813441	-0.36081677
22	-4.1229324	-1.96530779	-0.05917077	-0.37439696	0.39631051
23	1.64414484	0.75815571	-0.281629838	-0.83205511	-0.59439177

5.2.2. 森説の検討

助動詞の主成分分析の結果を森説の観点から分類したのが図6である。図6を見ると、西鶴の著作とされる(1)『好色一代男』と主に弟子の団水の著作とされる作品は、(1)が西鶴本浮世草子の近くに位置することから西鶴本浮世草子と区別できない。

次に、西鶴本浮世草子と模擬西鶴作品について考察すると、西鶴本浮世草子は全体的に散らばって位置し、模擬西鶴作品は中心のあたりから左上にかけて位置する。模擬西鶴作品の中でも(12)『色里三所世帯』と(14)『嵐は無常物語』は西鶴本浮世草子から離れて位置する。これは(12)と(14)では、「ず」の出現率が高いからである。この点で、(12)と(14)は西鶴本浮世草子と少し異なっている。

それに対して(9)『好色盛衰記』と(18)『浮世栄花一代男』は西鶴本浮世草子の近くに位置する。このことから、(9)と(18)は西鶴本浮世草子と似た特徴を持つと考えられる。よって、区別することはできない。以上のことから、5種類の助動詞の出現率を用いた計量分析では森説を裏付けできなかった。

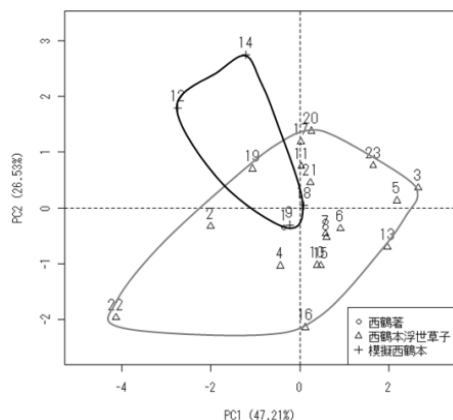


図6 森説の検討(助動詞の主成分分析)

5.2.3. 西鶴工房説の検討

助動詞の主成分分析の結果を、貞享3年以前の作品と多作期(貞享5年から翌元禄2年)の作品との違いという観点から分類すると、図7となる。貞享3年以前の作品は中心から下側にかけて位置する。これは「る・き・けり」の出現率が高いからである。それに対して、多作期の作品は全体的に散らばって位置する。これらのことから、貞享3年以前の作品には「ず」の出現率が低いという特徴を持つが、多作期の作品は全体的に散らばっており、特徴がないということが分かり、西鶴工房説を5つの助動詞の出現率を用いた計量分析では裏付けできなかった。

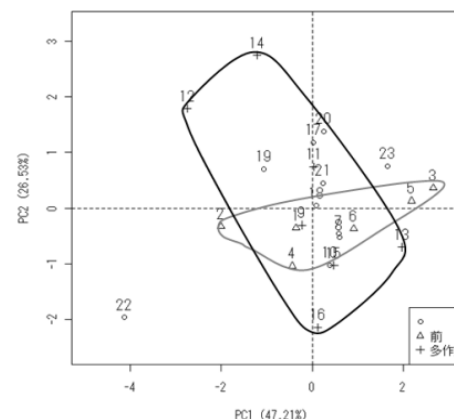


図7 西鶴工房説の検討(助動詞の主成分分析)

5.2.4. 遺稿集の検討

助動詞の主成分分析の結果を遺稿集の検討という観点から分類すると、図8となる。遺稿集のうち(22)『万の文反古』は「る」の出現率が高いため、他の遺稿集と離れて位置する。(22)以外の遺稿集は、中央から上側にかけてまとめられ、生前の西鶴作品の近くに位置している。これらのことから(22)以外の遺稿集は、生前の作品と同様の特徴をもち、(22)は他の西鶴の遺稿集とは、異なった特徴を持つ可能性がある。

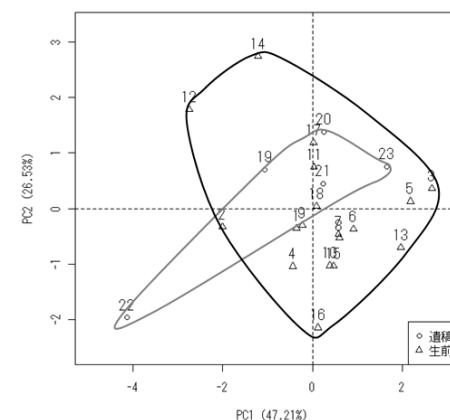


図8 遺稿集の検討(助動詞の主成分分析)

6. 考察

6.1. 森説について

7品詞及び5種類の助動詞の主成分分析結果からは、(1)『好色一代男』は西鶴本浮世草子と区別できないと考えられる。また、西鶴本浮世草子と模擬西鶴作品は区別することはできないと考えられる。したがって、『好色一代男』だけが西鶴の作品とする森説を計量的に裏付けることはできなかった。

6.2. 多作期の観点から西鶴工房説について

7品詞の主成分分析の結果と5種類の助動詞の主成分分析の結果が異なっており、したがって西鶴工房の存在に関しては明確なことは何もいえない。

6.3. 遺稿集について

7品詞及び5種類の助動詞の主成分分析結果をみると、(22)以外の遺稿集は生前の作品の近くに位置しており、したがって補作・修正説を裏付けることはできなかった。ただ、遺稿集のうち(22)『万の文反古』のみが他の遺稿集及び生前の作品と離れて位置しており、この作品に関しては、手がかわっている可能性を否定できない。

7. おわりに

(1)『好色一代男』は西鶴の作品として、間違いのない作品であると考えられている。そこで、主成分分析で(1)から離れて示された作品は西鶴作品とは異なった特徴を持つ可能性が考えられる。このことから、(1)から離れたものについて検討する。たとえば、品詞の主成分分析の結果においては、(14)『嵐は無常物語』、(22)『万の文反古』が離れており、(12)『色里三所世帯』、(16)『本朝桜陰比事』も離れている。また(3)『好色五人女』、(4)『好色一代女』は互いには近いが、(1)からは少し離れて位置している。助動詞の主成分分析の結果においては(12)、(14)、(22)が特に離れ、(2)『諸艶大鏡』、(16)が少し離れて位置している。これらのことから、品詞・助動詞の側面の両方からみて(1)から離れた『色里三所世帯』『嵐は無常物語』『本朝桜陰比事』『万の文反古』の4作品を西鶴の今後の検討課題にしたいと考える。

本研究においては西鶴の作品のみを研究対象とし、助作者の候補とされる西鶴の弟子など比べる対象を作らなかった。したがって、これが弟子の作品と似ているのか、またはまったく異なるものなのかについてはわからなかった。弟子の作品をデータベース化するなどして西鶴の作品と比較することも今後の課題としたい。

参考文献

- 村上征勝 (1994年). 『真贋の科学—計量文献学入門』朝倉書店.
編者 江本裕・谷脇理史 (1996). 『西鶴辞典』. おうふう.
中村幸彦 (1982). 『中村幸彦著述集 第六巻』. 中央公論社.

宗政五十緒 (1969). 『国文学解釈と鑑賞 10月特集増大号』. p26-p35. 『仮名草子から浮世草子へ』. 至文堂.

森銑三 (1955). 『西鶴と西鶴本』. 元々社.

中村幸彦 (1969). 『国文学解釈と鑑賞 10月特集増大号』. p10-p25. 『西鶴入門』. 至文堂.

谷脇理史 (1981). 『西鶴研究論攷—新典社研究5』. 新典社.

宗政五十緒 (1979). 『国文学 解釈と教材の研究』. p94-p99. 『西鶴と西鶴本—西鶴研究史における森銑三の意味』. 学灯社.

檜谷昭彦 (1979). 『国文学 解釈と教材の研究』. p100-p105. 『西鶴本と出版書肆—貞享五年の西鶴本』. 学灯社.

堤精二 (1979). 『国文学 解釈と教材の研究』. p14-p19. 『近代小説の方法・西鶴考』. 学灯社.

檜谷昭彦 (1982). 『国文学 解釈と教材の研究』. p17-p21. 『西鶴工房は存在したか(近代文学の謎-いま何が争点かく特集-)』. 学灯社.

谷脇理史 (1982). 『国文学 解釈と教材の研究』. p98-p104. 『西鶴の謎小事典』. 学灯社.

浅野晃, 富士昭雄, 谷脇理史, 西島孜哉, 小川武彦, 篠原進 (2000). 『新編西鶴全集 第一巻〜第四巻・本文篇』. 勉誠出版.

野間光辰 (1952). 『西鶴年譜考譜』. 中央公論社.

檜谷昭彦 (1979). 『古典文学/近代文学・作家の謎事典』. p90-p91. 『井原西鶴』. 学灯社.